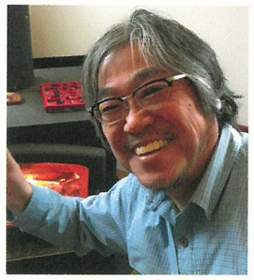
わたしとあなた、そしてみんな

子どもの発達と集団

第2回　「みている」とはどういうこと？



北海道教育大学
小渕隆司

おぶち　たかし／1960年生まれ。千葉県などで発達相談員として長年勤める。著書に『育ちあう発達相談“子どもの発見”を手がかりに』（かもがわ出版）など。

どんなふうにみているのだろう？

5月の上旬に保育園を訪問しました。朝の自由遊びの時間、子どもたちはホールで年齢に関係なく遊んでいます。子どもたちは登園すると、ホールを通って、自分の部屋のロッカーにジャンパーやリュックなどをしまい、ホールへ行きます。3歳児のKくん（自閉スペクトラム症）も自分のジャンパーとリュックを所定のところに置き、タオルをかけるなどの身支度を終えると、部屋からホールの光景をみていました。全体が眺められるホールの一角からほかの子どもたちの動きをみています。ある子どもをみていても、また別の子どもの動きが目に入ってきます。めまぐるしく移りゆく動きがそこにはあります。

Kくんの表情をみてみると、不安そうな表情ではありません。むしろ少し笑って楽しそうにみえます。Kくんにとっては、あちこちでいろいろなことをして、笑っている子どもたちをみることが楽しく、その意味で「あそび」なのかもしれません。

そんな時間が30分ほど経った頃、ホールに曲が流れました。するとホールで遊んでいた子どもたちは、自分のタイミングで、使っていたおもちゃなどを片付け始めます。5歳児は大型ブロックを重ね、決まった位置に運んでいます。手で持つことができるブロックを数個抱えて箱に入れに行く子どもたちもいます。Kくんは、その様子を立ったままずっとみています。

私は、Kくんの横にしゃがんで、近くにあるブロックを手にし、少ししてからそのブロックをKくんに差し出してみました。すると、Kくんはそのブロックを受け取り、手に持っているブロックをみて、まわりの子どもたちが片付けている箱へ視線を向け、自分でブロックを箱に入れました。さらに、その後は床に落ちているブロックをみつけ、それを箱へ入れに行きました。自分のペースで行動するため、時間はかかります。しかし、これはKくんが自発的に行動を起こすために必要な時間です。

みている行為が生み出す可能性

Kくんの様子をみながら、次のようなことを考えていました。

「周囲の子どもたちの行動をみていることは、なにを生み出すのだろうか」

「みている」参加の状態は、「みていることができる」として位置づけることが大切なのではないか。すぐに行動できるように働きかけるのではなく、「みていられる」安心できる状態を保障するということです。

子どもは乳児期後半から、他者をジッとみていることや、他者の行動のまねはしないが、その行動をみてよろこぶことがあります。子どもがよろこんだり、手を動かしたり挙げたりすると、周囲の大人はほめたり、声を出すなどの同調行動をします。そのような応答的なやりとりを通して、子どもは、自分から自発的に行動して他者の反応を期待するようになります。

さらに、子どもは、1歳頃になると周囲の子どもの行動をみて確かめながら、他者の行動をまねることで、他者の主観的情動体験を自分に重ねる体験をします。その意味で「みていること」は、単にその行動をまねることだけではなく、そのことによって生起する「うれしさやよろこび」などの情動の共有体験につながると言うことができます。

片付けの場面はどうでしょう。

子どもたちは、個人で行動をしていますが、一緒に遊んでいた数人で、あるいはたまたま周囲にいる子どもたち同士で一緒に片付ける可能性もありえます。

一人がブロックを片付け始めるとそれをみていた子も同じようにブロックを片付けることもあれば、ちがうものを片付けることもあります。あるいは、5歳児が「片付けの提案」をすることや、一緒に遊んでいた友だち同士で協力して声をかけ合って片付けることもあるでしょう。たまたま、Kくんの近くにいた私がブロックを差し出しましたが、ひょっとしたら、立ってみているKくんに、「はい、これ持って行って」とブロックを渡す子がいたら…。

集団活動としてこれらの活動を考えてみると、単に「片付けられるかどうか」ということではなく、「どのように」という発達的視点から考えてみることで、新たな意味と実践のヒントがみえてきます。

別の保育園では、4・5歳児が2歳児の子どもと一緒に片付けている姿がありました。もちろん全員がそのように2歳児と一緒に片付けていたわけではありません。一緒に片付けをした4・5歳児の子どもたちがいる一方で、友だち同士で一緒に使ったものを片付けていることもあります。そんなことがごく当たり前にあることが、集団のおもしろさなのではないでしょうか。

いろいろな可能性について考えることは、実践を豊かにしてくれます。